



〈 連載(144) 〉

ロッテルダムの遊覧船「スピード」に乗る



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授

池田 良穂

3 月末にオランダの船舶研究所「マリン」主催の国際会議に出席した。この会議は、現在、欧州の各国の船舶関連研究機関が一緒に行っている、船舶の損傷時復原性に関する共同プロジェクト「HARDER」の成果発表のためのもので、欧州以外のIMOに関連する機関にも出席が許された。

現在、IMOでは、客船と貨物船の損傷時復原性に関する国際規則を統一したのものとしてSOLAS条約の中に入れるべく作業を行っており、これを「損傷時復原性の調和作業」と呼んでいるが、この作業をアカデミックな面からサポートすべく立ち上げられたのが、このHARDERという研究プロジェクトである。

欧州では、安全性に関する研究を積極的にサポートする体制がとられ、このHARDERプロジェクトにも3年間で4億円という研究予算が欧州連合から支出されているという。日本で船舶の安全性の研究に携わる研究者としては夢のような規模の研究プロジェクトだが、さすがにそれだけの研究予算をつぎ込んだだけのことはあると感心するほどの成果が発表されていた。日

本からも、筆者の大学での研究成果の他、大阪大学および運輸省船舶技術研究所の研究成果を簡単に紹介してきた。日本でもほそぼそとながらもがんばっているぞー、とアピールは出来たようだ。

この国際会議の機会に、ロッテルダム港の遊覧船「スピード」にはほぼ30年ぶりに乗船することができた。

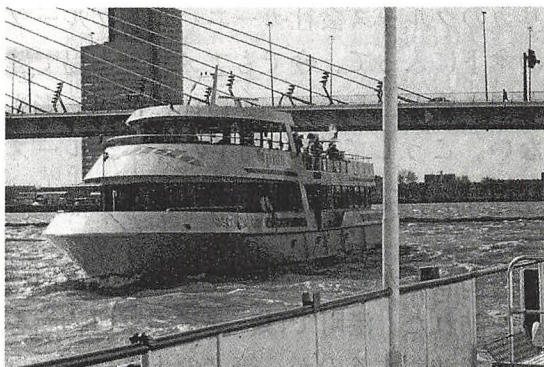
学生時代に欧州の港を1ヶ月かけて周遊して、船と港を見てまわった時以来、ロッテルダム港を訪れる機会がなかった。マリンのあるワーゲニンゲンから列車で1時間半かけてロッテルダムに到着。駅を降りてまっすぐに港へと向った。まずユーロマストと呼ばれる港のシンボルタワーを再訪。30年前には、このタワーの近くには2隻の保存客船が浮かび、船内見学もできたが、その姿はもうなかった。ロッテルダム港の遊覧船会社「スピード」もこのタワーの近くの棧橋から出ていたと記憶していたが、それも見当たらない。浮かぶバージ型の中華料理店だけがにぎにぎしく営業をしていた。

ロッテルダム港はライン川の河口に広がる河川港である。この川に沿って遡ること30分ほどの所に、目指す「スピード」の岸壁があった。冬季は一日に4~5便だけの運航のようだ。「スピード」のターミナルには、観光バスや乗用車の広い駐車場があり、さすがに欧州最大の港の遊覧船乗り場だけはあったと感心した。

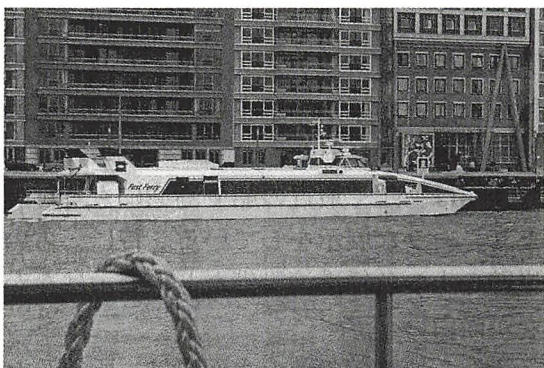
ターミナルの建物の中にはカフェテリアと売店があり、売店にはたくさんのマリナグッズが売られている。船の絵葉書もたくさん売られており、ついつい数十枚も購入してしまった。

乗 船した遊覧船は「バスコ・ダ・ガマ」という船名の新鋭遊覧船。船内にはバーカウンターがあり、飲み物や軽食を買うことができる。船内はゆったりとしたラウンジ風の造りになっている。しかし、乗船して来る人は真っ先に、厚いコートを着たまま、外のデッキの椅子に座る。やはり遊覧船に乗ったら、海の風に当たるのを好むのであろうか。結構寒い日であったが、外のデッキの方が、人気があるのには驚いた。

港の中には、高速客船や海上タクシーもたくさん走っていて、こうした船が市民の足として機能していることがよく判る。「バスコ・ダ・ガマ」は、岸壁を離れて下流に向う。兩岸にいろいろな船を見ることができ、筆者は、右舷に、左舷にと頻りに移動をして、カメラのシャッターを切りつづける。日本ではお目にかかれないようなRORO船、河川フィーダー用コンテナ船が次々と姿を現すから、ゆっくりと席を暖めている余裕はほとんどない。



ロッテルダム港の遊覧船「バスコ・ダ・ガマ」



ロッテルダム港内に就航する高速水上バス



ロッテルダムの海事博物館

かつてのオランダ随一の客船会社「ホランド・アメリカ・ライン」の重厚な本社ビルが見えてくる。このビルは、今ではホテルとして使われている。「ホランド・アメリカ・ライン」という会社名だけは、アメ

リカのクルーズ会社カーニバル・グループの傘下に入って、今でもアメリカ市場で健在であるが、そのルーツ自体には見る影もない。こうして約1時間半のミニクルーズはあっという間に終わってしまった。

下船してから、すぐ近くにある海事博物館を訪れた。港町では、必ず海事博物館を探して訪問するのが、筆者の大きな楽しみである。この海事博物館は、30年前にはなかったもの。ロッテルダムから列車で1時間ほどの所にあるアムステルダムの海事博物館は、古い船の展示を中心とした歴史博物館であるのに対し、ロッテルダムの海事博物館は、ごく最近の船や港湾にも着目したユニークな展示をしている。特に、古い岸壁の上の各種港湾設備などの展示はなかなか面白い。

また、博物館の前の水面には、所狭しと

保存船が浮かべられている。港の中で黙々と活躍してきた各種作業船が集められているのがユニークだ。この博物館の売店の中のブックショップには、オランダで発行された船の本だけでなく、イギリスやドイツの船の本もたくさん並べられている。船のファンにとっては、涎のでそうな本も多いが、帰りの飛行機での荷物の重量制限なども考えて、泣く泣く5冊だけ厳選して購入した。

この中の一冊をホテルでぱらぱらとめくっていると、見覚えのある神戸港での客船の写真がある。キャプションを見ると、そこには筆者の名前が「撮影者」としてでていた。きっと欧州の船友達と交換した写真が回りまわって、この本の筆者の手元に至り、本の中で使われたのであろう。船の写真撮ることを趣味とする筆者にとっては、とても嬉しい出来事であった。

Eメール質問箱

読者の皆様からの、ご質問・ご意見をインターネットで受付け致します。

どんなことでも結構です。どしどしお寄せ下さい。

ご質問については、小社で出来得る限り回答致します。不明の点についても関係各方面に問い合わせ、ご期待に沿えるよう努力いたします。



ご意見には実名・匿名の区別をご指示下さい
アドレス kyoyu@sanyonet.ne.jp